

当該学年の目標及び内容、進度での学習が難しい子どもへの 社会科(地理歴史科)の指導実践

— 「桐が丘L字型構造」に基づく指導の具体化—

○小林 博信*¹ 田中 麻衣*¹ 川間 健之介*² 宇野 彰*^{1,2}

(筑波大学附属桐が丘特別支援学校*¹) (筑波大学人間系*²)

KEY WORDS: 桐が丘L字型構造 社会的なものの見方や考え方 指導内容系統図

I. 目的

小学校及び中学校社会科では、人びとの生活の様子や特色などについて総合的な理解を深めていくことや、多面的・多角的に考察することを通して「公民的資質の基礎」を養うことが目標とされている。社会科では、「社会的なものの見方や考え方」を培うことを重視している。しかしながら、肢体不自由児童生徒の社会科の学習においては、障害を起因とした地図やグラフ、写真などの資料から必要な情報を読み取ることや、複数の情報を関連付けたりまとめたりすることにつまずきが多く見られる。このようなつまずきを示す肢体不自由児童生徒に対し、「社会的なものの見方や考え方」を着実に育てるためには、指導目標や指導内容を重点化し、障害特性に応じた指導を工夫することが必要である。

このような問題意識に基づき、岡部・松本・石田・川間(2015)、小山・新・田中・川間(2016)は、小学校及び中学校における地理的分野の内容を、「社会的な事象をとらえる思考の深まり」と「社会的視野の広がり」の2軸に基づき整理し、指導内容系統図(Fig参照)を作成した。

「社会的な事象をとらえる思考の深まり」とは、社会的な事象をどのようにとらえ、考察するかという視点である。教科として育成したい思考力を、次の5つの段階性をもって整理した。①資料などから事象を読み取る力(事象)、②複数の地域や事象を比べ、共通点や違いをとらえる力(比較)、③複数の事象の関連性をとらえる力(関連)、④地域の特色を総合的にとらえる力(特色)、⑤学習したことを活用して地域の課題を見出しその解決に向けて考える力(社会参画)。

本研究では、岡部ら(2015)、小山ら(2016)の研究を発展させ、作成した指導内容系統図を用いた高等学校(下学年・下部適用コース)地理歴史科における実践を報告する。

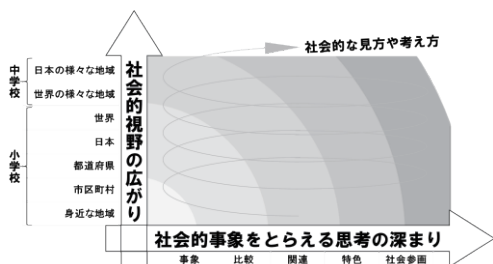


Fig 地理的分野における指導内容系統図 (模式図)

II. 方法

1. 高等部地理歴史科(地理 A)における授業実践

(1) 単元名: (1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察 イ世界の生活・文化の多様性、ウ地球的課題の地理的考察

(2) 対象生徒: 高等部第1学年下学年・下部適用コースの生徒1名(脳性まひ)

(3) 生徒の実態と手だて: 体幹が左に傾きやすい。抽象概念化が難しく、複数のことを同時に処理することが苦手である。視覚認知の困難さがある。書字に時間を要する。姿勢が崩れたときには言葉かけにより座り直しを促す。用

語の意味を理解しているかを確認する。思考する場面や資料を読み取る際は、継次的に提示する。図表は盛り込む要素を精選する。iPadを使用し、書字量の軽減を図る。

III. 結果

1. 高等部地理歴史科(地理 A)における授業実践

(1) 実態把握に基づく指導目標・指導内容の設定

ケース会等における実態把握を行い、さらに教科における実態把握として、指導内容系統図を活用し、対象生徒の「社会的な事象をとらえる思考の深まり」の段階を分析した。対象生徒の実態を、世界への興味・関心は強く、単純な比較や関連の力はあるが、複数の要素を踏まえて考えることに難しさがあるととらえた。

実態把握に基づいて、地理 Aにおける指導目標を、当該学年で取り扱う社会的な事象を通して、小学校段階で育てたい思考力を育成することとした。指導内容は育成したい思考力が伸ばせる地域・社会的な事象を選定し、重点化した。

(2) 実践と手だて・配慮の改善、評価

設定した指導目標・指導内容に基づき、「イ世界の生活・文化の多様性」では、中国など3つの地域に重点化して指導を行った。「社会的な事象をとらえる思考の深まり」の「比較・関連」を意識した授業を繰り返し展開した。当初は単純な因果関係しかとらえることができなかった対象生徒が、複数の因果関係をつかみながら根拠をもった価値判断を述べるようになるようになった。次の「ウ地球的課題の地理的考察」では、食料問題をテーマに自分の考えや予想の根拠になる資料を探し、自分なりの意見をまとめることができるようになった。

IV. 考察

高等学校地理歴史科(地理 A)では、小学校及び中学校段階を土台とし、「地理的な見方や考え方を培う学習を通して、国際社会に主体的に対応して生きる」力を養うことを目標としている。当該学年の目標及び内容、進度での学習が難しい生徒に対し、指導内容系統図を用いて、生徒一人ひとりの「社会的な事象をとらえる思考の深まり」の段階性を踏まえた実態把握に基づく指導目標・指導内容を設定し、「桐が丘L字型構造」に基づいた適切な手だて・配慮を踏まえた授業を展開することで、根拠を明確にした一貫性のある指導が可能になると考える。

文献

岡部盛篤・松本美穂子・石田周子・川間健之介(2015) 肢体不自由教育が培ってきた専門性に基づく個に応じた指導—当該学年の学習が難しい脳性まひ児を対象とした社会科地理的分野の指導内容設定の手続き—。日本特殊教育学会第53回大会発表論文集, P18-19.

小山信博・新洋子・田中麻衣・川間健之介(2016) 肢体不自由教育が培ってきた専門性に基づく個に応じた指導—当該学年の学習が難しい肢体不自由児を対象とした社会科地理的分野の指導内容設定の手続き—。日本特殊教育学会第54回大会発表論文集, P6-5. (KOBAYASHI Hironobu, TANAKA Mai, KAWAMA Kennosuke, UNO Akira)